

知の市場の創設

—改めて知の意味と市場の意義を問う—

5年以上にわたる準備の時を経て「知の市場」がいよいよ開講する。

知の市場は、「互学互教」の精神のもと「現場基点」を念頭に「社学連携」を旗印として実社会に根ざした新たな「知の世界」の構築を目指して、人々が自己研鑽と自己実現のために自立的に行き交い自律的に集う場である。では知とは何か。何故市場なのか。そして互学互教、現場起点、社学連携には如何なる意味があるのか。改めて検証してみたい。

類人猿は小枝で白蟻を釣り石で木の実を割る。技術や知識は人類の専売特許ではない。人々の日々の生活を始め「現の世界」における生き物の営みは、「知の世界」によって裏打ちされ支えられている。これまで「知の世界」の大宗を占めていたのは、文字に書かれた形式知ではなく経験や慣習といった暗黙知であった。しかし20世紀、科学研究や技術開発に伴う学術の進展により「知の創造」が莫大な形式知をもたらした。

この「知の爆発」は加速度を増しつつ急展開しており、「現の世界」に対して「知の世界」が日増しに影響力を強め、激しい価値観の変動をもたらした劇的な世界観の変革を求めている。もはや「知の世界」の動きを抜きにして日々の生活を論じることさえおぼつかない。「現の世界」において自らを生かしていくためにも、社会と世界の現況に対する地に足の着いた理解を深め幅広い教養を高めていくことが必須である。

あたかも水が高きから低きに流れるが如く、世代から世代へ時間を超え地域から地域へ空間を越えて知は伝搬する。その極めて自然な動きによってより多くの人々が知を活用することができる。こうして技術革新が起こり、社会変革が広がって世界の人々の生活に彩りを添えてきた。「知の創造」、「知の伝搬」、「知の活用」の三者は不即不離、互いに刺激しあいながら「知の世界」を豊かにしている。

しかし今日の猛烈な「知の爆発」はこの「知の伝搬」と「知の活用」に困難をもたらしている。一人の人間が知の習得に費やする時間には限りがある。30年の人生の過程で培われた知を一秒に圧縮して伝えたとしても時間が足りない。この困難な状況を前にしてともすると自らの位置する狭い範囲の「知の世界」の中に埋没してしまい、広い視野を持って物事の本質を捉えることを見失いがちである。「知

の創造」のみならず「知の伝搬」と「知の活用」に新しい工夫が必要である。投げ手側の視点に立った知の体系を受け手側の視点に立った使い勝手の良い知の体系へと「知の世界」を再編成していくことが不可欠である。

秋刀魚を売りに行く者あり、そして買いに来る者あり。大根を鬻ぐ者あり、そして求める者あり。市場には多くの人々がそれぞれ多様な想いを持って行き交う。市場の価値はそこで働く従業員の数で決まるわけではない。売手と買手の数によって決まる。市場の参加者が増せばますほど交換の組み合わせの数は増大し、市場の価値は百倍にも千倍にも拡大する。そして市場で交換されるのは売買する物だけではない。情報も交換される。市場は「知の伝搬」の重要な拠点でもあり、市場の規模は「知の伝搬」にも大きな意味を持つ。しかし市場の持つ意味はそれだけではない。

肉を売り人参を買いに来た者が、市場でたまたま大根を見かける。大根おろしを添えた秋刀魚の塩焼きを想起し、これを囲む家族の夜の団欒を思い起こす。その結果、人参に加えて秋刀魚と大根を買って帰る。極々ありそうな想定である。市場は想像力をかき立て「知の活用」や「知の創造」を促し、新たな価値を産み出す場でもある。そしてそこにより多様な人々が集いより多彩な情報が行き来すればするほど価値は万倍、億倍にもなる。

「知の世界」はそもそも「現の世界」から発した。二つの世界は表裏一体の関係であり、これまでは「知の世界」は「現の世界」に寄り添いつつ一步下がって歩んできた。しかし20世紀の第4四半期に事態は一変し始めた。「知の世界」の指し示す姿が新たな価値観や世界観をもたらした。そして社会の規範を変え「現の世界」の動きを先導する状況が現出した。地球環境をはじめとする現在世界が抱える多くの課題を解決していくためには先見的な行動が必要である。「知の世界」による「現の世界」の先導は必然的な流れである。

しかし、「知の世界」は「現の世界」から切り離された時、「^{うつろ}虚の世界」に変質しがちである。そして「虚の世界」への没入は歴史上多くの災禍をもたらしてきた。工場の現場、経営の現場のみならず市民運動の現場、生活の現場など直接社会と接している諸々の現場を忘れてはならない。「現場基点」を念頭に、現実の社会から「知の世界」を育む種子を得るとともに、常に「知の世界」を社会の現実に照らし検証する必要がある。盾の両面の様に「知の世界」と「現の世界」の関係を保つために現場は時に起点であり常に基点である。

企業も産業も経済もそのよって立つ社会の水準以上ではありえない。そこで働く人々も製品や商品を買って求める人々も社会の構成員である。それらの活動が社会の

民度の水準以上ではあり得ないのは当然である。また、こうした活動がその社会の法令や常識といった規範に則って行われる以上、そうした規範の枠組みをもたらす社会の教養の水準に規定されるのも自明の理である。ましてや、企業や産業が持っている重みは社会の進展とともに長期低落し、経済の枠内で見てももはや大勢ではない。「産学連携」を超えて「社学連携」を旗印とする所以がここにある。

日本も世界も未だ多くの課題を抱えている。そうした現実の社会の中で、10年、20年と懸命に事柄の解決に邁進すれば、必ずや他人に語るに足る何物かを持ち合わせている。それが仮に暗黙知のままであったとしてもこうした蓄積を埋没させ消失させてしまうことは大きな損失である。真摯に生きた者は誰でも学ぶ力とともに教える力を持っている。「互学互教」の精神のもと、互いの蓄積を互いに活かしていくことが有益である。さらに多少の努力によって蓄積を形式知に整備し普遍的な形に整えることであればより広く社会に伝搬し活用することができる。

「知の市場」は「互学互教」の精神のもと「現場基点」を念頭に「社学連携」を旗印として、人生30年の営みを新たな「知の世界」へと昇華させる。そしてここでいう「知」は単なる知識（Knowledge）ではない。特許や論文といった知的財産の概念を超えた価値をもち、売買や報酬といった領域から離れた意味を持つ知恵・英知（Wisdom）である。

社会の広範な領域において諸々の機関が人々の幅広い要請に応じて学習の機会を提供している。また、多様な背景を持つ人々がそれぞれの立場で役割を担いつつ勉学に励んでいる。こうした力を糾合し自立的で解放的な協力関係を形成しながら人々が自己研鑽と自己実現のために立場を越えて自ら活動する場(Voluntary Open Network Multiversity)として「知の市場 (FMW : Free Market of・by・for Wisdom)」を創設する。

「知の市場」の開講に至るまで多くの人々が参画し多様な努力を傾注してきた。「知の市場」はそうした人々の志の結晶である。そして今後も、これまで以上に多くの人々の力に支えられて展開してゆく。こうした人々の尽力に感謝の意を表しつつ、今後とも「知の市場」の新たな展開を期したい。

2009年4月1日

知の市場会長
増 田 優